

1. 現行学習指導要領の成果と課題

- 国語科においては、実生活で生きて働き、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けることや、我が国の言語文化¹を享受し継承・発展させる態度を育てること等に重点を置いて、その改善・充実を図ってきた。また、国語科で培った能力を基本として各教科等における言語活動の充実を推進してきた。
- これらの改善・充実を受け、OECD生徒の学習到達度調査（PISA）（2012年）においては、「読解力」の平均得点が比較可能な調査回以降、最も高くなっているなどの成果が見られる。また、全国学力・学習状況調査において、各教科等の指導のねらいを明確にした上で言語活動を適切に位置付けた学校の割合は、小学校、中学校ともに90%程度となっており、言語活動の充実を踏まえた授業改善が図られている。しかし、依然として教材への依存度が高いとの指摘もあり、更なる授業改善が求められる。
- 全国学力・学習状況調査等の結果によると、小学校では、文における主語を捉えることや文の構成を理解したり表現の工夫を捉えたりすること、目的に応じて文章を要約したり複数の情報を関連付けて理解を深めたりすることなどに課題があることが明らかになっている。
- 中学校では、伝えたい内容や自分の考えについて根拠を明確にして書いたり話したりすることや、複数の資料から適切な情報を得てそれらを比較したり関連付けたりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方等について評価することなどに課題があることが明らかになっている。
- 高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。また、文章の内容や表現の仕方を評価し目的に応じて適切に活用すること、多様なメディアから読み取ったことを踏まえて自分の考えを根拠に基づいて的確に表現すること、国語の語彙の構造や特徴を理解すること、古典に対する学習意欲が低いことなどが課題となっている。
- 児童生徒の読書状況については、小学生の平均読書冊数は10年前に比べて大きく増加したが、中学生、高校生に大きな変化は見られない。また、1か月間に読んだ本が0冊の児童生徒の割合は、小学生、中学生は10年間で減少傾向にあるが、高校生に大きな変化はなく、小学生、中学生に比べて高校生の読書活動に改善が見られない状況にある。

¹ 「言語文化」とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値を持つ言語そのもの、つまり文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、更には、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを幅広く指している。

- 今回の学習指導要領の改訂においては、これまでの成果を踏まえるとともに、これらの課題に適切に対応できるよう改善を図ることが求められる。その際、思考力・判断力・表現力等の育成を効果的に図るため、引き続き、記録、要約、説明、論述、討論等の言語活動の充実を図ることが必要である。

2. 育成を目指す資質・能力を踏まえた教科等目標と評価の在り方について

(1) 教科等の特質に応じた「見方・考え方」

- 各教科等を学ぶ意義を明確化するため、今回の改訂では、各教科等において身に付けるべき資質・能力の三つの柱を整理することとしている。これらの資質・能力の育成に当たって中核的な役割を果たすのが、各教科等の本質に根ざした「見方・考え方」である。総則・評価特別部会において、「見方・考え方」とは「様々な事象を捉える教科等ならではの視点」と「教科等ならではの思考の枠組み」とであると議論されている。
- 国語科は、様々な事物、経験、思い、考え等をどのように言葉で理解し、どのように言葉で表現するか、という言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象とするという特質を有している。それは、様々な事象の内容を自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的とするものではないことを意味している。
- 事物、経験、思い、考え等を言葉で理解したり表現したりする際には、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、創造的・論理的思考、感性・情緒、他者とのコミュニケーションの側面²から、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けるといったことが行われており、そのことを通して、自分の思いや考えを形成し深めることが、国語科における重要な学びであると考えられる。
- 本ワーキンググループでは、自分の思いや考えを深めるため、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けることが、「言葉による見方・考え方」と整理した。
- なお、国語科においては、現行の学習指導要領において、「古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。」(小学校第5学年及び第6学年)、「聞き取った内容や表現の仕方を評価して、自分のものの見方や考え方を深めたり、表現に生かしたりすること。」(中学校第3学年)、「優れた表現に接してその条件を考えたり、書いた文章について自己評価や相互評価を行ったりして、自分の表現に役立て

² 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会言語能力の向上に関する特別チームにおいて、これまでの各種会議等(文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」(平成16年2月3日)等)の議論の成果を踏まえ、言語能力を構成する資質・能力について、①創造的・論理的思考の側面、②感性・情緒の側面、③他者とのコミュニケーションの側面の三つの側面から整理されたことを受け、本ワーキンググループにおいても、同様の整理をしている。

るとともに、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにすること。」（高等学校「国語総合」）
などのように「ものの見方や考え方」等の言葉を用いてきた。

この「ものの見方や考え方」等の言葉は、ある個人または集団が、ある対象について、具体的にどのように受け止めたり感じたり考えたりしたかを表すものであり、「言葉による見方・考え方」とは異なるものである。言葉や文章等に表されている個人または集団の見方や考え方を理解するためには、それを表している言葉を「言葉による見方・考え方」を働かせて理解する必要がある。このため、「言葉による見方・考え方」を成長させることで、より深く、言葉や文章等に表されている「ものの見方や考え方」を理解するとともに、自分の「ものの見方や考え方」を広げたり豊かにしたりすることにもつながると考えられる。

(2) 小・中・高等学校を通じて育成を目指す資質・能力の整理と、教科等目標の在り方

- 本ワーキンググループにおいては、学校段階ごとに育成を目指す資質・能力について以下のとおり整理した（資料1）。学校段階ごとの国語科の教科目標についても、このような資質・能力の整理に基づき検討していくことが求められる。

(小学校)

- ◎言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し適切に表現することを通して、国語に関する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
- ①日常生活に必要な国語の特質について理解し使うことができるようにする。
- ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、日常生活における人との関わりの中で、言葉で自分の思いや考えを深めることができるようにする。
- ③言葉を通じて伝え合うよさを味わうとともに、言葉の大切さを自覚し、言語感覚を養い、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

(中学校)

- ◎言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し適切に表現することを通して、国語に関する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
- ①社会生活に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができるようにする。
- ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を豊かにし、社会生活における人との関わりの中で、言葉で自分の思いや考えを深めることができるようにする。

③言葉を通じて伝え合う価値を認識するとともに、言語文化に関わり、言語感覚を豊かにし、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

(高等学校)

◎言葉による見方・考え方を働かせ、国語で的確に理解し効果的に表現することを通して、国語に関する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

①生涯にわたる社会生活や専門的な学習に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができるようにする。

②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を豊かにし、多様な他者や社会との関わりの中で、言葉で自分の思いや考えを深めることができるようにする。

③言葉を通じて伝え合う意義を認識するとともに、言語文化の担い手としての自覚を持ち、言語感覚を磨き、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

○ また、小・中学校においては、文字の由来や文字文化に対する理解を深めること³について、高等学校においては、実社会・実生活に生かすことや多様な文字文化に対する理解を深めることについて、高等学校芸術科（書道）との円滑な接続を意識してその位置付けを検討する必要がある。

○ さらに、幼児教育で育まれる「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝え合い」などといった資質・能力との関連について十分に意識するとともに、これらの基礎の上に立って、小・中・高等学校それぞれの学校段階において、国語科でどのように資質・能力を身に付けさせるのかを明確にしていくことが必要である。

○ 国語科において育成を目指す資質・能力については、言語能力の向上に関する特別チームにおける言語能力を構成する資質・能力の整理を踏まえ、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に沿った整理を行い、資料2のとおり取りまとめた。

○ 「知識・技能」には、「言葉の働きや役割に関する理解」、「言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け」、「言葉の使い方に関する理解と使い分け」、「書写に関する知識・技能」、「伝統的な言語文化に関する理解」、「文章の種類に関する理解」、「情報活用に関する知識・技能」などの項目が挙げられる。

³ 高等学校芸術科（書道）との円滑な接続を意識する際、高等学校芸術科（書道）において育まれる「書に関する見方・考え方」（感性を働かせて、書を、書を構成する要素やそれらが相互に関連する働きの視点で捉え、書かれた言葉、歴史的背景、生活や社会、諸文化などとの関わりから、意味や価値を見いだすこと。 ※）との接続も含め、小・中学校において、文字の由来や文字文化に対する理解を深めることが重要である。

（※「芸術ワーキンググループにおける取りまとめ（案）」参照）

そのうち、「言葉の働きや役割に関する理解」は、自分が用いる言葉に対するメタ認知に関わることであり、言語能力を向上させる上で重要な要素である。このことは、これまでの学習指導要領においても扱われてきたが、実際の指導の場面において十分なされてこなかったことが指摘されている。また、「言葉の使い方に関する理解と使い分け」には、これまで「知識・技能」としては明確に位置付けられてこなかった、話したり聞いたり書いたり読んだりする技能を含むものとしている。

- 「思考力・判断力・表現力等」には、国語で理解したり表現したりするための力として、創造的・論理的思考の側面において「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」が、感性・情緒の側面において「言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力」が、他者とのコミュニケーションの側面において「言葉を通じて伝え合う力」がそれぞれ挙げられる。また、全ての側面に関係する力として「構成・表現形式を評価する力」、「考えを形成し深める力」が挙げられる。

これからの子供たちには、創造的・論理的思考を高めるために「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」がこれまで以上に必要とされるとともに、自分の感情をコントロールすることにつながる「感情や想像を言葉にする力」や、他者との協働につながる「言葉を通じて伝え合う力」など、三つの側面の力がバランスよく育成されることが必要である。

また、より深く、理解したり表現したりするためには、「情報を編集・操作する力」、「新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」、「新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力」などの「考えを形成し深める力」を育成することが重要である。

- これらの力はそれぞれ別々に働くこともあるが、理解したり表現したりする上では、通常、複数の力が結び付いて働いている。

例えば、中学校段階では、「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」のうち「論理（情報と情報の関係性：共通－相違、原因－結果、具体－抽象等）の吟味・構築」や「情報を編集・操作する力」を働かせて、文章に表現されている内容や展開を根拠に基づいて解釈し、情報を整理・構成して自分の思いや考えを表現することなどが考えられる。

あるいは、「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」のうち「推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化」や「新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」を働かせて、社会生活における様々な情報を、既有の知識・経験に基づいて解釈、整理・構成し、新しい発想や主張を形成することなどが考えられる。

- 「学びに向かう力・人間性等」には、例えば、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとする態度、集団としての考えを発展・深化させようとする態度、心を豊かにしようとする態度、自己や他者を尊重しようとする態度、我が国の言語文化を享受し、継承・発展させようとする態度、自ら進んで読書をすることで人生を豊かにしようとする態度が挙げられる。

- なお、資料2に整理された資質・能力の三つの柱は相互に関連し合ったものであるため、その育成に当たっては、必ずしも、それぞれを別々に育成したり、知識・技能を習得してから思考力・判断力・表現力等を身に付けるといった順序性を持って育成したりするものではないことに留意する必要がある。

「知識・技能」の資質・能力を育成するためには、同時に「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力の育成が必要であり、「思考力・判断力・表現力等」と「学びに向かう力・人間性等」の資質・能力が高まることによって「知識・技能」の資質・能力が高まることにもつながる。「思考力・判断力・表現力等」や「学びに向かう力・人間性等」の育成においても、その他の二つの柱との関係は同様である。

(3) 資質・能力を育む学習過程の在り方

- (2)に掲げた資質・能力を育成していくためには、学習過程の果たす役割が極めて重要である。国語科においては、ただ活動するだけの学習にならないよう、活動を通じてどのような資質・能力を育成するのかを示すため、資料3のとおり、現行の学習指導要領に示されている学習過程を改めて整理し、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域における学習活動の中で、三つの柱で整理した資質・能力がどのように働いているかを含めて図示した。

その際、言語能力の向上に関する特別チームにおいて整理された、「認識から思考へ」という過程の中で働く理解するための力や、「思考から表現へ」という過程の中で働く表現するための力が、各領域の中で、主にどこで重点的に働いているのかを踏まえて検討した。

- 例えば、「読むこと」の領域においては、「学習目的の理解（見通し）」、「選書（本以外も含む）」、「構造と内容の把握」、「精査・解釈」、「考えの形成」、「他者の読むことへの評価、他者からの評価」、「自分の学習に対する考察（振り返り）」、「次の学習活動への活用」といった学習活動を明示している。

あわせて、「構造と内容の把握」においては「知識・技能」の各項目が、「精査・解釈」においては「思考力・判断力・表現力等」のうち「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力」、「言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力」、「言葉を通じて伝え合う力」が、「考えの形成」においては「思考力・判断力・表現力等」のうち「考えを形成し深める力」といった資質・能力が働いていることも明示している。

- 「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のいずれの学習過程においても、「情報を編集・操作する力」、「新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力」、「新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力」を働かせ、考えを形成し深めることが特に重要である。

- これらの一連の学習過程に沿って学習を進める上では、資料2に整理された資質・能力の三つの柱のうち「学びに向かう力・人間性等」が大きな原動力となる。「学びに向かう力・人間性等」で挙げられている態度等が基盤となって、子供が自ら次の学習活動に向かおうとする意識が生まれ、「知識・技能」や「思考力・判断力・表現力等」の育成が図られる。また、これらの過程を意識的に行うことを通じて、より一層「学びに向かう力・人間性等」が育まれ、更に次の学習活動に向かう意欲が高まるなどの正の循環が見込まれる。
- 国語科においては、こうした学習活動は言葉による記録、要約、説明、論述、討論等の言語活動を通じて行われる必要がある。したがって、国語科で育成を目指す資質・能力の向上を図るためには、資質・能力が働く一連の学習過程をスパイラルに繰り返すとともに、一つ一つの学習活動において資質・能力の育成に応じた言語活動を充実することが重要である。
- なお、一連の学習過程は、必ずしも一方向の流れではなく、指導のねらいに応じて、戻ったり繰り返したりする場合があること、単元全体を通して身に付けさせたい力を育成するのであって、一単位時間の中に必ずしも当該単元で育成を目指す全ての学習内容を位置付ける必要はなく、その一部のみを取り扱う場合があること、単元によってそれぞれの学習活動に軽重を付けて扱うものであることなどに留意する必要がある。
- 特に、「学習目的の理解（見通し）」、「自分の学習に対する考察（振り返り）」などについては、一連の学習過程が始まる前と終わった後にそれぞれ行うことに限定されるものではなく、終始一貫して意識しておくべき要素であることに留意する必要がある。
- また、小・中学校においては、それぞれの発達段階に応じて学習過程の一部を統合的に取り扱うことはあり得るものの、基本的には資料3と同様の流れで学習過程を捉えることが必要である。

(4) 「目標に準拠した評価」に向けた評価の観点の在り方

- 「目標に準拠した評価」の着実な実施を図るとともに、教科・校種を越えた共通理解に基づく組織的な取組を促す観点から、観点別評価における観点については資質・能力の三つの柱を踏まえたものとすることが求められている。
- 現行の国語科においては、「(国語への) 関心・意欲・態度」、「話す・聞く能力」、「書く能力」、「読む能力」、「(言語についての) 知識・理解(・技能)」の観点で評価しているが、本ワーキンググループにおいては、(2)に掲げた資質・能力を踏まえつつ、資料4のとおり、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の三つの観点及びその趣旨について、考え方を整理した。
- 「知識・技能」については、個別の事実に知識のみを指すものではなく、社会の中で生きて働く概念的な知識として習得されるものであることや、一定の手順や段階を追

って身に付く個別の技能のみならず、変化する状況や課題に応じて主体的に活用できる習熟した技能として習得されるものであることなど、広範な意味で用いられていることに留意する必要がある。

- また、資質・能力のうち「学びに向かう力・人間性等」の部分については、「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価を通じて見取ることができる部分と、観点別評価や評定にはなじまず、個人内評価を通じて見取る部分があり、ここでは観点別評価として見取るべきものを掲げていることに留意する必要がある。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、子供自身が自分の学びや変容を見取ることができ、説明することができるということが、主体的に学習に取り組む態度が育まれている状態であるとの指摘がなされた。

- 具体的な評価の場面では、例えば、「知識・技能」の観点から評価を行う事項（「○○することができる」）や「思考・判断・表現」の観点から評価を行う事項（「○○している」）のうち、その単元の最も重視したい事項を、「主体的に学習に取り組む態度」の観点から評価を行う事項（「○○しようとしている」）として捉え、その単元や複数の単元において、「知識・技能」又は「思考・判断・表現」の観点と「主体的に学習に取り組む態度」の観点の両方から評価することが必要である。
- 資質・能力の三つの柱を踏まえて整理した今回の観点別評価の観点については、現行の「言語についての知識・理解・技能」がそのまま「知識・技能」に関する観点に、現行の「話す・聞く能力」、「書く能力」、「読む能力」がそのまま「思考力・判断力・表現力等」に関する観点に移行するものではないため、具体的な学習評価の方法や学習評価を子供たちの学びや指導の改善につなげる方策等について、引き続き検討が求められる。

3. 資質・能力の育成に向けた教育内容の改善・充実

（1）科目構成の見直し

- 高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと、話し合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。

こうした長年にわたり指摘されている課題の解決を図るため、科目構成の見直しを含めた検討が求められており、本ワーキンググループにおいては、資料2に示された資質・能力の整理を踏まえ、以下のような科目構成（資料5）にすることが適当とした。

なお、以下の科目構成の説明において、「学びに向かう力・人間性等」については特に言及していないが、全ての科目において育成されるものである。

《高等学校国語科の科目構成》

- 国語は、我が国の歴史の中で創造され、上代から近現代まで継承されてきたものであり、そして現代において実社会・実生活の中で使われているものである。このことを踏まえ、後者と関わりの深い実社会・実生活における言語による諸活動に必要な能力を育成する科目「現代の国語（仮称）」と、前者と関わりの深い我が国の伝統や文化が育んできた言語文化を理解し、これを継承していく一員として、自身の言語による諸活動に生かす能力を育成する科目「言語文化（仮称）」の二つの科目を、全ての高校生が履修する共通必履修科目として設定することが考えられる。
- 共通必履修科目「現代の国語（仮称）」は、実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目として、「知識・技能」では「伝統的な言語文化に関する理解」以外の各事項を、「思考力・判断力・表現力等」では全ての力を総合的に育成することが考えられる。

具体的には、実社会・実生活における言語による諸活動に必要な国語の能力を育成するために、例えば、目的に応じて多様な資料を収集・解釈し根拠に基づいて論述する活動や、文学作品（小説、随筆、詩歌等）等を読んで、構成や展開、優れた表現などの効果について、言葉の意味、働き、使い方等に注目して批評する活動、根拠を持って議論し互いの立場や意見を認めながら集団としての結論をまとめる活動等を重視することが考えられる。
- 共通必履修科目「言語文化（仮称）」は、上代（万葉集の歌が詠まれた時代）から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目として、「知識・技能」では「伝統的な言語文化に関する理解」を中心としながら、それ以外の各事項も含み、「思考力・判断力・表現力等」では全ての力を総合的に育成することが考えられる。

特に、古典（古文や漢文）だけでなく、古典に関わる近現代の文章を通じて、言語文化を言葉の働きや役割に着目しながら社会や自分との関わりの中で生かすことのできる能力を育成する指導がなされるよう、示し方に留意する必要がある。さらに、古典や近現代の文章において、言葉を対象化することを通じて我が国の文化と外国の文化との関わりを理解することなどについても、言語文化の一つの側面として扱うことが考えられる。また、指導においては、文語文法の指導を中心とするのではないことに留意する必要がある。
- 選択科目においては、共通必履修科目「現代の国語（仮称）」及び「言語文化（仮称）」において育成された能力を基盤として、「思考力・判断力・表現力等」の言葉の働きを捉える三つの側面のそれぞれを主として育成する科目として、「論理国語（仮称）」、「文学国語（仮称）」、「国語表現（仮称）」を設定することが考えられる。

また、「言語文化（仮称）」で育成された資質・能力のうち「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため、ジャンルとしての古典を学習対象とする「古典探究（仮称）」を設定することが考えられる。

- なお、共通必修科目である「現代の国語（仮称）」及び「言語文化（仮称）」において育成された能力は、特定の選択科目ではなく全ての選択科目につながる能力として育成されることに留意する必要がある。
- 選択科目「論理国語（仮称）」は、多様な文章等を多面的・多角的に理解し、創造的に思考して自分の考えを形成し、論理的に表現する能力を育成する科目として、「思考力・判断力・表現力等」の創造的・論理的思考の側面の力を主として育成することが考えられる。
- 選択科目「文学国語（仮称）」は、小説、随筆、詩歌、脚本等に描かれた人物の心情や情景、表現の仕方等を読み味わい評価するとともに、それらの創作に関わる能力を育成する科目として、「思考力・判断力・表現力等」の感性・情緒の側面の力を主として育成することが考えられる。
- 選択科目「国語表現（仮称）」は、表現の特徴や効果を理解した上で、自分の思いや考えをまとめ、適切かつ効果的に表現して他者と伝え合う能力を育成する科目として、「思考力・判断力・表現力等」の他者とのコミュニケーションの側面の力を主として育成することが考えられる。
- 選択科目「古典探究（仮称）」は、古典を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目として、主に古文・漢文を教材に、「知識・技能」の「伝統的な言語文化に関する理解」を深めることを重視するとともに、「思考力・判断力・表現力等」を育成することが考えられる。
- また、「古典探究（仮称）」以外の選択科目においても、高等学校で学ぶ国語の科目として、探究的な学びの要素を含むものとなることが考えられる。
- なお、高校生の読書活動が低調であることなどから、各科目において、高校生がそれぞれの読書の意義や価値について実感を持って認識することにつながるような指導の充実、読書活動の展開が必要である。
- 科目の名称については、当該科目で育成される資質・能力が明確になるよう、今後、更に検討することが求められる。

（２）資質・能力の整理と学習過程の在り方を踏まえた教育内容の示し方の改善

- 2.（２）に掲げた学校段階ごとに育成を目指す資質・能力（資料１）、これらを「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に沿って整理したもの（資料２）、及び、2.（３）に掲げた学習過程（資料３）を、学習指導要領の構造に適切に反映させることが求められる。
- 学校段階ごとに育成を目指す「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」に基づき教科の「目標」を示すとともに、子供たちを社会に

送り出すまでに国語科においてどのような力を身に付けることを目指すのかを明確にした上で、小・中・高等学校の教科内容の系統性を検討することが求められる。

- 学習指導要領の「内容」に関しては、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」の3領域において、育成を目指す資質・能力（資料2）を明確に示すとともに、現行の学習指導要領において明確化されている学習過程を、本ワーキンググループにおける整理（資料3）を踏まえて見直すことが求められる。

（3）現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し

（読書活動の充実）

- 読書は、多くの語彙や多様な表現を通して様々な世界に触れ、これを擬似的に体験したり知識を獲得したりして、新たなものの見方や考え方に会うことを可能にする。このため、読書は、国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである。自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うために、国語科の学習が読書活動に結びつくよう小・中・高等学校を通じて読書指導を改善・充実するとともに、教育課程外の時間においても、全校一斉の読書活動など子供たちに読書をする習慣が身に付くような取組を推進する必要がある。
- 特に、小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあるとの指摘がなされている。また、考えを形成し深める力を身に付ける上で、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることが必要である。小学校低学年で表れた学力差が、その後の学力差の拡大に大きく影響していることを踏まえると、語彙量を増やしたり語彙力を伸ばしたりする指導の改善・充実が重要であるが、そのためにも読書活動の充実を図る必要がある。
- このため、読書の量を増やすことのみならず、読書の質をも高めることができるよう、国語科において読書指導を改善・充実するとともに、学校図書館と連携した読書活動の充実を図ることが重要である。その際、例えば、指導のねらいに応じて様々な文章を読んだり調べたりするなどの多様な読書活動を指導計画に位置付けることが考えられる。

（学年別漢字配当表の見直し）

- 漢字指導の改善・充実の観点から、児童の学習負担を考慮しつつ、常用漢字表の改定（平成22年）、児童の日常生活及び将来の社会生活、国語科以外の各教科等の学習における必要性を踏まえ、都道府県名に用いる漢字を「学年別漢字配当表」に加えることが適当である。なお、追加する字種の学年配当に当たっては、当該学年における児童の学習負担に配慮することが必要である。

- 漢字指導に当たっては、漢字を何度も機械的に書かせたり、家庭学習に偏ったりするのではなく、漢字が身に付き生活や学習の中で楽しく使えるようになるよう、その在り方を改善・充実する必要がある。

特に、都道府県名に用いる漢字など他教科等において必要な学習用語を表記する漢字については、児童が当該教科等の学習と関連のあるものとして漢字を学び、その定着が図られるよう、当該教科等と関連付けて指導することが求められる。

加えて、例えば、常用漢字表の前書きや「常用漢字表の字体・字形に関する指針（報告）」（平成28年2月29日文化審議会国語分科会）等を踏まえた指導と評価の充実、象形だけでなく、形声等も含めた漢字の成り立ちの指導の充実、漢字として意味が分かるようにするための、和語としての訓読みの指導の充実などが求められる。

（伝統文化に関する学習の改善）

- 現行の学習指導要領では、国語科においても我が国や郷土が育んできた伝統文化に関する教育を充実したところであるが、引き続き、我が国の言語文化に親しみ、愛情を持って享受し、その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため、伝統文化に関する学習を重視することが必要である。
- このため、伝統文化に関する学習については、小・中・高等学校を通じて、古典⁴に親しんだり、楽しんだり、古典の表現を味わったりする観点、古典についての理解を深める観点、古典を自分の生活や生き方に生かす観点、文字文化（書写を含む）についての理解を深める観点から整理を行い、改善を図ることが求められる。
- 発達段階によっては、文法的な理解を図る前に、古典の表現に対する言語感覚を育てていくことが古典学習のみならず実社会・実生活において生きて働く国語の能力の基盤となる。そのためには、小学校低学年から、昔話や神話、伝承などを含む古典の音読や暗唱、古典に関連する遊びなどを中心に、古典に親しんだり、楽しんだり、表現を味わったりする学習を推進することが重要である。
- また、例えば、小・中学校において、古典の現代語訳や古典について解説した文章などを読み、現代にもつながる日本人のものの見方や考え方に触れ、高等学校の「言語文化（仮称）」において、更に深く考察するなど古典についての理解を発達段階に応じて深めていくことが考えられる。

⁴ ここで言う「古典」とは、古文・漢文というだけでなく、我が国において古来引き継がれてきた優れた固有の思想やものの見方、考え方、日本人の心性などが現れたものである。これらは、私たち日本人が言葉によって生み出してきた精神的所産の蓄積であり、そこに現れた思想やものの見方、考え方などを踏まえて、我が国の自然や人々の生活などを言葉という視点から捉え直し、自らがそうした文化的背景の中で成長してきた文化的な存在であることを自覚するとともに、その優れた点を継承していく担い手としての認識を深めることが望まれる。

- 高等学校の課題としては、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことが挙げられている。このため、小・中学校の段階から、古典に親しんだり楽しんだりするだけでなく、ことわざや故事成語の成り立ちや意味を知って使ったり、代表的な古典作品の一節を引用して文章を書いたりするなど、古典を自分の生活や生き方に生かす学習を充実することが重要である。また、高等学校の段階においても、古典に現れた思想や感情などが現代の生活や文化とどのような関係性を持っているかについて考察したり、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値を探究したりするなど、古典を自分の生活や生き方に生かす観点から、学習を充実することが求められる。
- なお、書写については、手本を模倣するだけの学習のみではなく、小学校段階では、平仮名、片仮名、漢字の由来や、点画（はね、払い等）、字形などの特質を理解して書くこと、中学校段階では、文字文化の多様性や表現の豊かさを理解して効果的に書くことなど、高等学校段階の国語科及び芸術科（書道）の学習につながる、用具・用材を含めた文字文化についての理解を深める指導を充実することが求められる。

（地域の言語文化に関する学習の充実）

- 我が国には、長い歴史の中で形成されてきた多様な方言が各地域に存在する。しかし、近年の社会状況の大きな変化に伴って、共通語の浸透が進み、その伝統的な特徴を失いつつある。そのような中、東日本大震災における被災や避難に伴い消滅の危機と考えられる被災地の方言に関し、方言の力を活用した復興の取組が進むなど、地域の生活や文化を支える言葉としての重要性が再認識されている。
- 方言や民話など地域が育んできた言語文化を地域の一員として継承していく態度の育成が求められており、そのためには、地域の言語文化を調べたり、地域の人たちによる民話の語りを聞いたり、方言を用いた劇を行ったりする機会を充実することなどが考えられる。

（言葉を取り巻く環境の変化を踏まえた学習の充実）

- 情報化の進展に伴い、コンピュータや携帯電話・スマートフォンなどの情報機器の広範な普及は子供たちの言語生活に大きな影響を与えている。一方で、平成26年度の「国語に関する世論調査」においては、「文字を手書きする習慣をこれからの時代も大切にすべきであると思うか」との質問に対して91.5%の人が「大切にすべきであると思う」と回答するなど、文字を手書きすることの重要性が認識されている。また、「改定常用漢字表」（平成22年6月7日文化審議会答申）においても、「漢字を手書きすることは極めて重要であり、漢字を習得し、その運用能力を形成していく上で不可欠なもの」と位

置付けられる」、「手で書くということは日本の文化としても極めて大切なものである」と言及されている。

このことを踏まえ、国語科書写においては、将来の社会生活に向けて文字を正しく整えて速く書く力を身に付けるとともに、文字の手書きをして、視覚、触覚、運動感覚など様々な感覚が複合する形で言葉を学習することで、その言葉の表す意味や概念も含めて習得することや、読み手に分かりやすくどのように書くかという相手意識を持つこと、手書きした文字に対して読む側が受け取る表現の効果などを学ぶことが求められる。

このほか、携帯電話やスマートフォンで連絡したり交流したりする時代となり、読んだり書いたりする文章の文体の特徴が、短く省略されたり記号が多用されたりする方向に大きく変わっていることが指摘されている。このため、学校教育においては、整った文を学習することが一層重要となる。

- また、人はじっくりと考えながら書くことにより自分の思いや考えを明確にすることができ、書きながらその思いや考えを掘り下げたり改めたりして深めることができる。相手の話を書き留める際も、その内容を理解し要点をまとめながら書くことが重要である。このため、学校教育においては、資料3に整理された「書くこと」の学習過程に沿って、テーマの設定、情報収集、内容の検討、構成・表現形式の検討、考えの形成・深化など、書く前の準備を十分行うとともに、書きながら検討し直したり考えを深めたりするとともに、書いた後で推敲して書き直すなど、時間を掛け深く考えて書くことの重要性を学ぶことが求められる。
- また、インターネットの普及により、誰もが不特定多数の他者へ大量に情報を発信できる時代を迎えている。このような環境の中で、相手を想像しながらその媒体の特徴などを考慮して書くことが重要になっている。特に、インターネット等により発信する場合には、これまで出会ったことのない文化的・社会的背景を持つ他者の目に触れる可能性があることや自分の書いたものが後々まで残る可能性があることなどを考えて書くことに留意する必要がある。

なお、子供たちの人間関係の問題には言葉によるコミュニケーションが深く関わっているが、インターネットや携帯電話・スマートフォンによる連絡・交流の特徴—匿名性や即時性、文章量の制限—などが大きな要因となっていることも多い。こうした観点からも、相手がどのように受け取るかを考えるなど相手意識を持って書くことなどが一層重要となっている。
- インターネット上の情報に限らないが、情報を収集する際にも、情報の妥当性、信頼性を吟味するなど情報の扱いに注意する必要がある。また、日々大量の情報に接している影響から、情報収集のために断片的な情報をピックアップするような読み方をする傾向についての懸念が指摘されている。国語科の学習の中で、「読む」ことは、単に情報だけを読み取るのではなく、書き手の表現の仕方や考え方などを学ぶことでもあることを教えていくことが求められている。

(他教科等との連携)

- 現行の学習指導要領においては、全ての教科等において言語活動を重視し充実を図ってきたところであるが、今後、「アクティブ・ラーニング」の視点から授業改善に取り組んでいくためには、より一層、言語活動の充実を図り、全ての学習の基盤である言語能力を向上させることが必要不可欠である。
- このため、言語能力の向上に関する特別チームにおける議論も踏まえ、国語科が、中心的役割を担いながら他教科等と連携して言語能力の向上を図るとともに、国語科が育成する資質・能力が各教科等において育成する資質・能力の育成にも資するようにすることがカリキュラム・マネジメントの観点からも重要である。
- なお、日本語と外国語に共通する言葉の普遍性という観点から、言葉がどのように働くのか、どのような役割を果たしているのかということ、特に小学校で重点的に学ぶことが言語能力の向上に資すると考えられるが、こうした学習については、日本人の母語である国語の能力を育成する国語科において行うことが求められる。

(その他)

- 一般社会では、国語科において育成する必要があるとされる能力として、物事を多面的・多角的に吟味し見定めていく力（いわゆる「クリティカル・シンキング」）や、情報活用能力、質問する力、メモを取る力、要約する力などが言及されることがある。
これらの能力と資料2に整理された資質・能力の関係については、例えば、「クリティカル・シンキング」や情報活用能力の育成は、特に「思考力・判断力・表現力等」の「情報を多面的・多角的に精査し構造化する力（論理の吟味・構築、妥当性、信頼性等の吟味）」、「考えを形成し深める力」などの育成と深く関わっている。
また、質問する力の育成は、特に「知識・技能」の「聞き方」や「思考力・判断力・表現力等」の「言葉を通じて伝え合う力（相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解）」などの育成と深く関わっている。
このため、これらの能力は資料2に整理された資質・能力を育成する中で総合的に育まれることになると考えられる。

4. 学習・指導の充実や教材の充実

(1) 特別支援教育の充実、個に応じた学習の充実

- 資質・能力の育成と国語科の目標の実現とを目指し児童生徒の十分な学びが実現できるよう、国語科の学習過程や「言葉による見方・考え方」を踏まえ、具体的な学習の場面で考えられる「困難さの状態」に対する「配慮の意図」と「手立て」の例について、以下のような形で明示していくことが適当である。

(小学校国語科における配慮の例)

- ・文章を目で追いながら音読することが難しい場合には、自分がどこを読むのかが分かるよう、教科書の文を指等で押さえながら読むよう促したり、教科書の必要な箇所を拡大コピーして行間を空けたり、語のまとまりや区切りが分かるように分かち書きをしたり、読む部分だけが見える自助具（スリット等）を活用したりするなどの配慮をする。
 - ・文章の内容を理解するのが難しい場合には、内容を理解する際の助けとなるよう、教科書の文章を範読して音声情報を補ったり、教科書の作品の原典となる絵本の読み聞かせをして視覚情報を補ったり、児童の実態に応じた本や文章を紹介して読むよう促したりするなどの配慮をする。
 - ・自分の考えをまとめたり、文章の内容と自分の経験とを結び付けたりすることが難しい場合には、児童がどのように考えればよいのか分かるように、考える項目や手順を示した学習計画表やプリントを準備したり、一度音声で表現し、実際にその場面を演じる活動を行った上で書かせたりするなどの配慮をする。
 - ・自分の立場以外の視点で考えたり他者の感情を理解したりするのが難しい場合には、児童が身近に考えられる教材（例えば、同年代の主人公の物語など）を活用し、文章に表れている気持ちやその変化等が分かるよう、行動の描写や会話文に含まれている気持ちがよく伝わってくる語句等に気付かせたり、気持ちの移り変わりが分かる文章のキーワードを示したり、気持ちの変化を図や矢印などで視覚的に示してから言葉で表現させたりするなどの配慮をする。
 - ・自分が書いたものを声に出して読むことが難しい場合には、紙やホワイトボードに書いたものを提示したりICT機器を活用したりして発表するなど、児童の表現を支援するための多様な手立てを工夫し、自分の考えを持つことや表すことに対する自信を持つことができるような配慮をする。
- また、小・中学校においては、全国学力・学習状況調査により個々の児童生徒の学力の状況を把握し指導の改善につなげている。例えば、小学校においては、調べて分かった事実に対する自分の考え方を理由や根拠を明確にして書くことに課題が見られた児童に対して、指導のねらいに応じ、考え方と理由や根拠を明確に表現するワークシートを用いるなどの工夫が行われている。中学校においては、ことわざや慣用句等の語彙が不足しているという調査結果を受けて、身の回りで使用される語句を集めて言葉ノートや語彙カードを作成して定期的に生徒間で交流させたり教員が確認したりすることで、個に応じた語彙の拡充のための支援を継続的に行っている実践などがある。
- このような工夫を参考に、他学年や高等学校においても個に応じた指導を一層充実させていくことが重要である。

(2) 「主体的・対話的で深い学び」の実現

○ 国語教育の改善・充実を図るためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、後述する「アクティブ・ラーニング」の三つの視点に立った授業改善に取り組んでいくことが重要である。言語能力を育成する国語科においては、言語活動を通して資質・能力を育成する。このため、国語科における「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善とは、「アクティブ・ラーニング」の視点から言語活動を充実させ、子供たちの学びの過程の更なる質の向上を図ることであると言える。

i) 学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

国語科においては、この学びの実現に向けて、子供自身が目的や必要性を意識して取り組める学習となるよう、学習の見通しを立てたり振り返ったりする学習場면을計画的に設けること、子供たちの学ぶ意欲が高まるよう、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題として、子供たちに身近な話題や現代の社会問題を取り上げたり自己の在り方生き方に関わる話題を設定したりすることなどが考えられる。特に、学習を振り返る際、子供自身が自分の学びや変容を見取り自分の学びを自覚することができ、説明したり評価したりすることができるようになることが重要である。

ii) 子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

国語科においては、この学びの実現に向けて、例えば、子供同士、子供と教職員、子供と地域の人が、互いの知見や考えを伝え合ったり議論したり協働したりすることや、本を通して作者の考えに触れ自分の考えに生かすことなどを通して、互いの知見や考えを広げたり、深めたり、高めたりする言語活動を行う学習場면을計画的に設けることなどが考えられる。

iii) 各教科等で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見いだして解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。

国語科においては、この学びの実現に向けて、「言葉による見方・考え方」を働かせ、言葉で理解したり表現したりしながら自分の思いや考えを広げ深める学習活動を設けることなどが考えられる。その際、子供自身が自分の思考の過程をたどり、自分が理解したり表現したりした言葉を、創造的・論理的思考の側面、感性・情緒の側面、他者とのコミュニケーションの側面からどのように捉えたのか問い直して、理解し直したり表現し直したりしながら思いや考えを深めることが重要であり、特に、思考を深めたり活性化させたりしていくための語彙を豊かにすることなどが重要である。

○ 具体的には、これら一連の学習過程の中で、

- ・例えば、互いの立場や考えの違いを踏まえて話し合う力を身に付けるために、話し合う際に「話題に沿って、筋道を立てて発言し合っているか」、「自分の思いを適切に表す言葉や表現になっているか」、「相手の立場や気持ちを捉えて聞いたり、それらを踏まえて話したりしているか」などの観点を教員が適宜提示し、話し合った後、話し合いを進める上で効果的だったこと、更に改善すべきだったことを書かせることで自分たちの学びを振り返り、次に生かす学習が考えられる。
 - ・例えば、課題に対して複数の資料から情報を得て、自分の意見を具体的に書く力を身に付けるために、「必要な情報が正確に書かれているか」、「根拠や事例、論理の展開などは適切か」、「自分の意図や主張が明確に表現できているか」、「読み手が納得するような表現や展開で書かれているか」などについて、これまでの学習を振り返って確認させ、書く前の準備を十分行い、書きながら検討し直したり考えを深めたりするとともに、書いた後で十分に推敲して文章を完成させる学習が考えられる。
 - ・例えば、文学的な文章を読んで自分の考えを形成する力を身に付けるために、「文章からどのような思いやメッセージが伝わったか」を自分の経験と結び付けて考えさせ、文章の構成や表現に着目した話し合いを通して、それぞれの考えを広げ深めながら、「文章が自分の生き方にどのように影響するのか」、「それはどのような構成や表現の効果によるものなのか」などについて考察させる学習が考えられる。
- なお、「アクティブ・ラーニング」は、本来、資質・能力を育成するための視点であり授業の「型」ではないにもかかわらず、その趣旨が学校等に十分伝わっていないように感じられること、活動に注目が行き過ぎているが、活動そのものではなく、活動が学びにどのようにつながるかが重要であることが十分理解されていないと思われることなどの懸念が指摘された。
- また、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた学習・指導の改善・充実のために、ICTを活用することも効果的であると考えられる。例えば、話す様子を撮影して自身の様子を振り返らせる活動、インターネット等を用いて情報を収集する活動、調べたり考えたりしたことを大型ディスプレイ等を用いて発表したり互いの情報を交流したりする活動などが考えられる。

(3) 教材の在り方

- 3. に記載された資質・能力の育成に向けた教育内容の改善・充実のためには、教材の在り方を見直すことが必要である。
- 学習指導要領には、「読むこと」以外にも「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域があるにもかかわらず、依然として授業が「読むこと」の指導に偏っている傾向がある。国語科の授業が言語活動を通じて資質・能力を育成する授業となるよう、教材の改善・充実を図ることが求められる。

- 次期学習指導要領の趣旨を実現するため、主たる教材である教科書において、授業の中で言語活動が一層充実するような教材提示の在り方や、同じ題材においても、育成を目指す資質・能力や様々な言語活動を、教員が指導に応じて選べるような教材の在り様などが求められる。
- 子供たちが実際の社会生活で経験する言葉は、媒体（文字、音声、映像）と情報量が異なる多様なもので成り立っている。子供たちを取り巻く環境の現状を踏まえると、国語科の学習においても、発達段階に応じて、適宜、多様なメディア表現を扱い、情報を正確に読み取ったり豊かに想像したりする力を育成することが重要である。
- 高等学校の科目構成の見直しに応じて、それぞれの科目の趣旨が実現されるよう、教材の在り方を検討することが求められる。本ワーキンググループにおいては、特に「言語文化（仮称）」は、古典と近現代の文章の両方を教材として活用しながら我が国の言語文化への理解を図る科目とすることや、絵巻物のような絵画的資料が「言語文化（仮称）」や「古典探究（仮称）」において読む対象となり得ることについて指摘がなされている。
- 国語科の教材として取り上げるジャンルに関しては、小・中・高等学校の各学校段階において、様々な文章（文学的な文章や説明的な文章など）を資質・能力の育成を踏まえて位置付けることが求められる。

5. 必要な条件整備等について

- 国語科において、2. に整理された資質・能力の育成を図るためには、教員養成や教員研修による教員の資質・能力の向上、学校図書館やICT環境の整備・充実などの条件整備が求められる。
- 本ワーキンググループにおいて整理された次期学習指導要領の方向性を実現するためには、小・中・高等学校の各段階で、国、教育委員会、教育センター等において、国語科の目標や三つの柱で整理された育成を目指す資質・能力、資質・能力を育む学習過程、「目標に準拠した評価」に向けた評価の観点等を周知するとともに、それを実現するための授業の在り方等についての研修を充実することが求められる。また、教員養成課程においても同様に、趣旨を十分踏まえたカリキュラムの検討を図ることが求められる。
- 高等学校の科目構成の見直しに関しても、その趣旨が実行されるよう、国、教育委員会、教育センター等において、国語科の必修科目及び選択科目で育成を目指す資質・能力や各教科・科目の目標と内容を周知するとともに、それを実現するための授業の在り方等についての研修を充実することが求められる。また、教員養成課程においても同様に、趣旨を十分踏まえたカリキュラムの検討を図ることが求められる。
- 大学入学者選抜は、実態として高等学校教育等に大きな影響を与える存在となっているが、従来の大学入学者選抜は、文章の内容や表現の仕方等を読み取る評価に偏ること

が多かったのではないかとの指摘がなされている。高等学校教育において次期学習指導要領の趣旨が実現されるようにするためにも、大学入学者選抜が、本ワーキンググループにおいて整理された資質・能力をバランスよく評価する方向性⁵に沿って改革されることが望まれる。

- 読書活動の充実に必要な学校図書館については、読書活動の拠点となる「読書センター」、授業に役立つ資料を備え学習支援を行う「学習センター」、情報活用能力を育む「情報センター」としての役割を踏まえ、学校における読書活動や言語活動、探究活動の場としての役割も期待されていることから、以下のとおり一層の条件整備が求められる。
 - ・多様な形態の図書館資料（視聴覚資料、新聞等を含む）の計画的・組織的な整備を推進すること。
 - ・学校図書館の運営を支える専門的人材である司書教諭や学校司書の資質・能力の向上や配置の拡充を図ること。
 - ・校長をリーダーとする学校運営全体の中で学校図書館を適切に位置付けるとともに、その運営を地域の視点も入れたP D C Aサイクルの中で改善すること。
 - ・図書館資料の提供や学級文庫の設置、読書推進活動の企画・実施などにより、図書館を活用した読書活動の活性化を図ること。その際、必要に応じて地域の公共図書館や他の学校図書館との連携を図ること。
 - ・教員が司書教諭や学校司書と連携し、学校図書館を活用した読書指導や国語科の学習活動の充実に図ること。

など

- 社会に開かれた教育課程の実現に向けて、地域と連携して学びの基盤を整えていくことが求められる。例えば、実社会や実生活との関わりを重視した学習課題を設定する際に、身近な社会である地域の問題を取り上げたり、読み聞かせや取材などを行う際に、地域の人たちの協力を得たり、伝統文化に関する学習を行う際に、地域に受け継がれてきた方言や民話などを題材にして地域の人たちと交流したりすることが考えられる。

⁵ 高大接続システム改革会議「最終報告」（平成28年3月31日）においては、「大学入学者選抜は、これら高等学校教育と大学教育とを接続し、双方の改革の実効性を高める上で重要な役割を果たすものであり、入学希望者が培ってきた「学力の3要素」を多面的・総合的に評価するものに転換する。」とされている。

【高等学校】

- ◎言葉による見方・考え方を働かせ、国語で的確に理解し効果的に表現することを通して、国語に関する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
- ①生涯にわたる社会生活や専門的な学習に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができるようにする。
 - ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を豊かにし、多様な他者や社会との関わりの中で、言葉で自分の思いや考えを深めることができるようにする。
 - ③言葉を通じて伝え合う意義を認識するとともに、言語文化の担い手としての自覚を持ち、言語感覚を磨き、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

【中学校】

- ◎言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し適切に表現することを通して、国語に関する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
- ①社会生活に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができるようにする。
 - ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を豊かにし、社会生活における人との関わりの中で、言葉で自分の思いや考えを深めることができるようにする。
 - ③言葉を通じて伝え合う価値を認識するとともに、言語文化に関わり、言語感覚を豊かにし、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

【小学校】

- ◎言葉による見方・考え方を働かせ、国語で正確に理解し適切に表現することを通して、国語に関する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
- ①日常生活に必要な国語の特質について理解し使うことができるようにする。
 - ②創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、日常生活における人との関わりの中で、言葉で自分の思いや考えを深めることができるようにする。
 - ③言葉を通じて伝え合うよさを味わうとともに、言葉の大切さを自覚し、言語感覚を養い、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

【幼児教育】 (※幼児期の終わりまでに育ってほしい姿のうち、特に関係のあるものを記述)

- ・身近な事象に積極的に関わり、物の性質や仕組み等を感じ取ったり気付いたりする中で、思い巡らし予想したり、工夫したりなど多様な関わりを楽しむようになるとともに、友達などの様々な考えに触れる中で、自ら判断しようとして考え直したりなどして、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。(思考力の芽生え)
- ・遊びや生活の中で、数量などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、必要感からこれらを活用することを通して、数量・図形、文字等への関心・感覚が一層高まるようになる。(数量・図形、文字等への関心・感覚)
- ・言葉を通して先生や友達と心を通わせ、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付けるとともに、思い巡らしたりしたことなどを言葉で表現することを通して、言葉による表現を楽しむようになる。(言葉による伝え合い)

知識・技能

思考力・判断力・表現力等

学びに向かう力・人間性等

- 言葉の働きや役割に関する理解
- 言葉の特徴やきまりに関する理解と使い分け
 - ・書き言葉(文字)、話し言葉、言葉の位相(方言、敬語等)
 - ・語、語句、語彙
 - ・文の成分、文の構成
 - ・文章の構造(文と文の関係、段落、段落と文章の関係)
- 言葉の使い方に関する理解と使い分け
 - ・話し方、書き方、表現の工夫
 - ・聞き方、読み方、音読・朗読の仕方
 - ・話合いの仕方
- 書写に関する知識・技能
- 伝統的な言語文化に関する理解
- 文章の種類に関する理解
- 情報活用に関する知識・技能

国語で理解したり表現したりするための力

【創造的・論理的思考の側面】

- 情報を多面的・多角的に精査し構造化する力
 - ・推論及び既有知識・経験による内容の補足、精緻化
 - ・論理(情報と情報の関係性:共通-相違、原因-結果、具体-抽象等)の吟味・構築
 - ・妥当性、信頼性等の吟味
- 構成・表現形式を評価する力

【感性・情緒の側面】

- 言葉によって感じたり想像したりする力、感情や想像を言葉にする力
- 構成・表現形式を評価する力

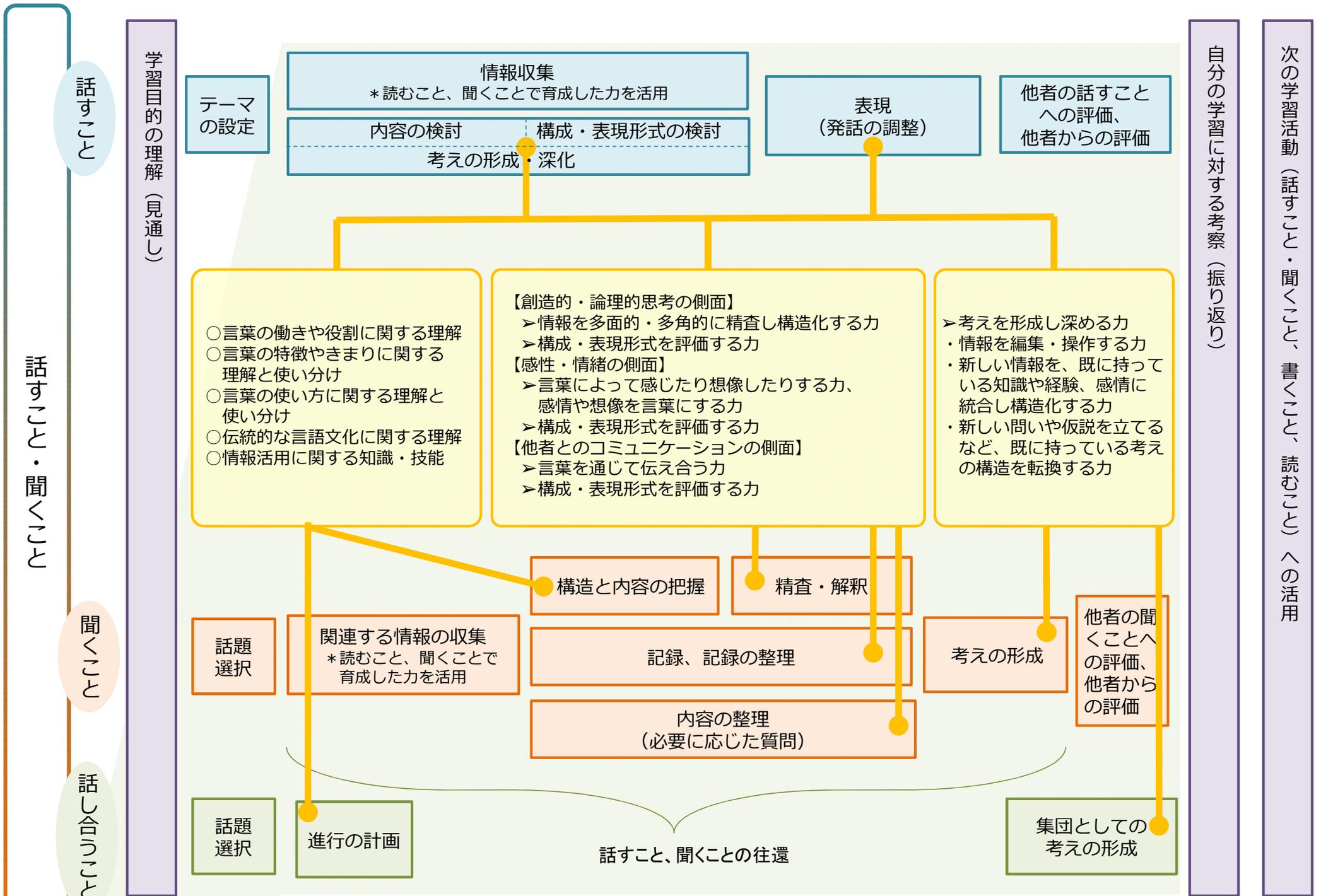
【他者とのコミュニケーションの側面】

- 言葉を通じて伝え合う力
 - ・相手との関係や目的、場面、文脈、状況等の理解
 - ・自分の意思や主張の伝達
 - ・相手の心の想像、意図や感情の読み取り
- 構成・表現形式を評価する力

《考えの形成・深化》

- 考えを形成し深める力(個人または集団として)
 - ・情報を編集・操作する力
 - ・新しい情報を、既に持っている知識や経験、感情に統合し構造化する力
 - ・新しい問いや仮説を立てるなど、既に持っている考えの構造を転換する力

- ・言葉が持つ曖昧性や、表現による受け取り方の違いを認識した上で、言葉が持つ力を信頼し、言葉によって困難を克服し、言葉を通して社会や文化を創造しようとする態度
- ・言葉を通じて、自分のものの見方や考え方を広げ深めようとするとともに、考えを伝え合うことで、集団としての考えを発展・深化させようとする態度
- ・様々な事象に触れたり体験したりして感じたことを言葉にすることで自覚するとともに、それらの言葉を互いに交流させることを通して、心を豊かにしようとする態度
- ・言葉を通じて積極的に人や社会と関わり、自己を表現し、他者の心と共感するなど互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度
- ・我が国の言語文化を享受し、生活や社会の中で活用し、継承・発展させようとする態度
- ・自ら進んで読書をし、本の世界を想像したり味わったりするとともに、読書を通して様々な世界に触れ、これを擬似的に体験したり知識を獲得したり新しい考えに出会ったりするなどして、人生を豊かにしようとする態度



※必ずしも一方向、順序性のある流れではない。

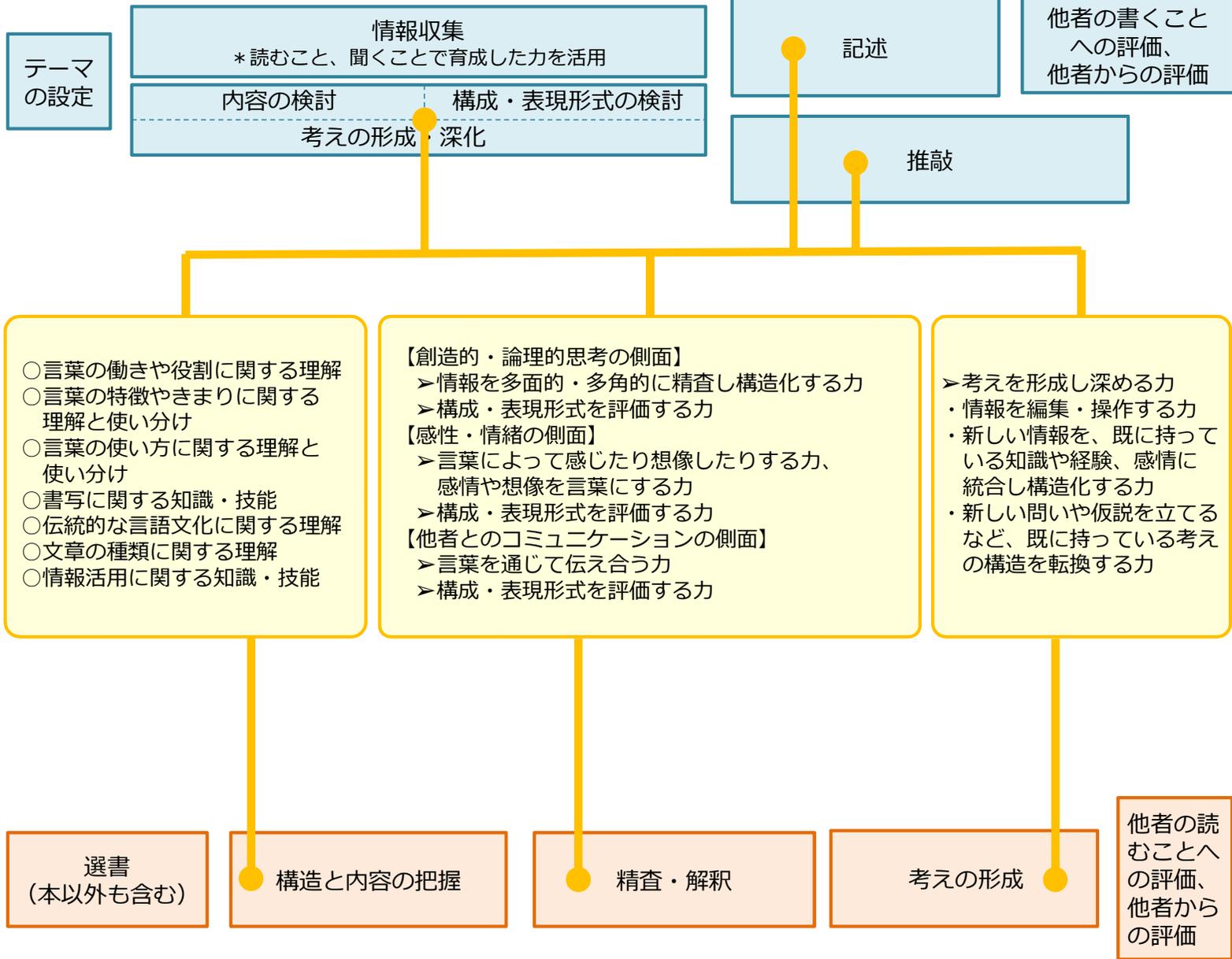
書くこと

読むこと

学習目的の理解（見通し）

自分の学習に対する考察（振り返り）

次の学習活動（話すこと・聞くこと、書くこと、読むこと）への活用

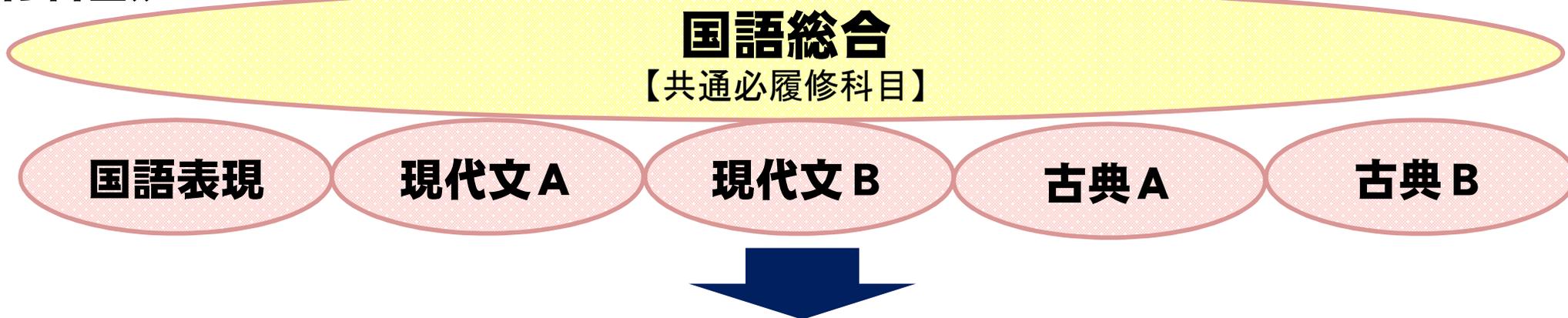


※必ずしも一方向、順序性のある流れではない。

国語科における評価の観点のイメージ

観点（例） ※具体的な観点の書きぶりは、 各教科等の特質を踏まえて検討		知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
各観点の趣旨の イメージ（例） ※具体的な記述については、 各教科等の特質を踏まえて検討	高等学校	生涯にわたる社会生活や専門的な学習に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができている。	創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を豊かにし、多様な他者や社会との関わりの中で、国語で的確に理解し効果的に表現することを通して自分の思いや考えを深めている。	言葉を通じて積極的に多様な他者や社会と関わったり、思いや考えを深めたりしようとするとともに、言葉の意義を認識し、自覚的に読書に取り組み、言葉を効果的に使おうとしている。
	中学校	社会生活に必要な国語の特質について理解し適切に使うことができている。	創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を豊かにし、社会生活における人との関わりの中で、国語で正確に理解し適切に表現することを通して自分の思いや考えを深めている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを深めたりしようとするとともに、言葉の価値を認識し、進んで読書に取り組み、言葉を適切に使おうとしている。
	小学校	日常生活に必要な国語の特質について理解し使うことができている。	創造的・論理的思考や感性・情緒を働かせて思考力や想像力を養い、日常生活における人との関わりの中で、国語で正確に理解し適切に表現することを通して自分の思いや考えを深めている。	言葉を通じて積極的に人と関わったり、思いや考えを深めたりしようとするとともに、言葉のよさを味わい、読書に取り組み、言葉をより良く使おうとしている。

《現行科目》



《改訂の方向性》

共通必修履修科目(案)

【現代の国語(仮称)】

実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目

- 実社会・実生活における言語による諸活動に必要な国語の能力の育成
- 例えば、
 - ・目的に応じて多様な資料を収集・解釈し、根拠に基づいて論述する活動
 - ・文学作品等を読んで、構成や展開、優れた表現などの効果について言葉の意味や働きに着目して批評する活動
 - ・根拠を持って議論し互いの立場や意見を認めながら集団としての結論をまとめる活動等の重視

【言語文化(仮称)】

上代(万葉集の歌が詠まれた時代)から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目

- 我が国の伝統や文化が育んできた言語文化を理解し、これを継承していく一員として、自身の言語による諸活動に生かす能力の育成
- 古典(古文・漢文)だけでなく、古典に関わる近現代の文章を通じて、言語文化を、言葉の働きや役割に着目しながら社会や自分との関わりの中で生かすことのできる能力の育成

選択科目(案)

【論理国語(仮称)】

多様な文章等を多角的・多面的に理解し、創造的に思考して自分の考えを形成し、論理的に表現する能力を育成する科目

(主として、創造的・論理的思考の側面から「思考力・判断力・表現力等」を育成)

【文学国語(仮称)】

小説、随筆、詩歌、脚本等に描かれた人物の心情や情景、表現の仕方等を読み味わい評価するとともに、それらの創作に関わる能力を育成する科目

(主として、感性・情緒の側面から「思考力・判断力・表現力等」を育成)

【国語表現(仮称)】

表現の特徴や効果を理解した上で、自分の思いや考えをまとめ、適切かつ効果的に表現して他者と伝え合う能力を育成する科目

(主として、他者とのコミュニケーションの側面から「思考力・判断力・表現力等」を育成)

【古典探究(仮称)】

古典を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目

(ジャンルとしての古典を学習対象として「思考力・判断力・表現力等」を総合的に育成)